

令和8年7月吉日

芽室町長 様
芽室町教育委員会教育長 様
芽室町議会議長 様

上美生地区における新しい学校のあり方や

教育制度に関する要望書

代表団体：上美生地区協議会	会長 河口啓明
連名団体：上美生地区山村留学推進協議会	会長 川端数昭
上美生社会教育協会	会長 斉藤直裕
特定非営利活動法人上美生	代表理事 河口啓明
上美生老友クラブ	会長 岡崎栄太郎
上美生ほしぞらプラン会議	代表 蘆田千秋

日頃から、芽室町の教育や町づくりのために一生懸命取り組んでいただき、ありがとうございます。

先日、教育委員会より発表されました「令和9年度の3月（2028年3月）の上美生小中学校の閉校と、中心部校への統合」という方針について、私たち地域の団体や当事者である保護者は、大変重い事実として受け止めました。

私たちはこのことで地域がギスギスしたり、反対運動で対立したりすることは望んでいません。人数の多い大きな学校で、たくさんの友達と揉まれながら刺激を受けてほしいと願う親の気持ちも、少人数だからこそできる、一人ひとりに寄り添った温かい教育を受けさせたいと願う親の気持ちも、どちらも子どもを想う、親としての切実で大切な願いであると私たちはよく理解しており、その選択を大切にしたいと考えています。

その上で、上美生が持つ「豊かな自然環境」や「少人数だからこそできる手厚い教育」に魅力を感じ、ここで子育てがしたいと願って移住してきた世帯や、ずっとこの土地で暮らし続けている世帯があることを、忘れないでいただきたいのです。

これからの時代、子育てや教育の選択肢が一つだけになってしまうのは、芽室町全体の魅力を減らしてしまうことに繋がります。そこで私たちは、統合の方針を受け止めた上で、これまでの学校をただ終わらせるのではなく、双方の親の願いをどちらも叶えられるような「新しい道」を地域とともに探っていただきたく、以下の通り強く要望いたします。

要望の前提1：上美生地区の取り組みと実績

上美生地区は独自の強みを持ち、町外・道外からの「選ばれる地域」として機能してきました。

(1) 自然豊かな農村地域の暮らし

1907（明治40）年、上美生に開拓の鉏が下ろされてから120年が経とうとしています。農業を基幹産業としながら、豊かな自然と景観の魅力に惹かれ、都市部からの移住者を柔軟に受け入れ、地域活動を展開してきました。

(2) 山村留学の継続的な実績

現在、センター留学4名、親子留学3名。そのほか、上美生地域で暮らすことを選んで移住している親子約10組の受け入れを維持しており、年間10名前後の人口流入を独自に創出しています。今までにのべ300人弱の山村留學生を受け入れてきました。

(3) NPOと連携した地域教育

JAの店舗撤退を機に、地域で暮らす住民や高齢者の買い物、通院や通学などの支援が必要と、NPO法人上美生を設立し、店舗経営、自家用車有償旅客運送、地域行事への協力などを行ってきました。

(4) 多様な教育の受け皿：

上美生小中学校は、少人数ならではの手厚い指導により、個性を伸ばしたい児童や、大規模校になじめない児童のセーフティネットとしての役割を果たすとともに、地域と連携した行事への参加など、他校では経験できない「実社会と結びついた学び」の場を地域ぐるみで提供しています。

要望の前提2：学校存続が断たれた場合の社会的・経済的デメリット

学校の統廃合は、短期的には行政の管理コストを削減しますが、中長期的には以下の甚大な損失を招きます。

(1) 地域活力の低下

子どもからお年寄りまで多世代交流の場が減ることは、子供の社会性、生きる力を育む場を喪失し、高齢者は活躍の場を失い、健康寿命の短縮につながります。その結果行政の高齢者福祉のコストが増大し、地域の元気も失われます。

(2) 移住・定住施策の根底的な崩壊

「山村留学」による流入がゼロになり、親子留学、子育て世帯の離脱、ひいては上美生地区からの若年層の流出が加速します。

(3) 地域防災・コミュニティの機能不全

指定避難所としての機能喪失に加え、地域の伝統行事や共同作業が維持不能となり、将来的な公的負担が増大します。

(4) 教育の選択肢喪失による「選ばれない町」への転落：

教育の多様性が失われることは、教育立町を目指す芽室町のブランド力を大きく毀損します。

要望事項：小中学校の存続と新たな仕組みづくりに向けた具体的要望・提案

私たちは、学校の統合という転換期を「縮小」として終わらせるのではなく、双方の保護者のニーズに寄り添い、芽室町教育をもっと魅力的にしていける「前向きなチャンス」にしたいと考えています。そのために、以下の項目について町と地域が共に考え、実現に向けて柔軟で前向きな意見交換を継続していくことを要望いたします。

(1) 「学校選択制」および「小規模特認校制度」の導入（最優先要望）

大規模校に通わせたい親の希望と、上美生で育てたい親の希望をどちらも叶える仕組みづくりを第一に進めていただくよう強く要望します。上美生から大規模校への通学を可能にする「学校選択制」や、町内全域から上美生地区の特色ある教育環境を希望する家庭の通学を認める「小規模特認校制度」などの制度をうまく組み合わせ、双方向の選択権を確保してください。これにより、大規模校への通学を希望する家庭のニーズを満たしつつ、少人数教育を求める家庭の希望も残すことができ、双方の願いを叶えることが可能となります。これまでの統合の特例措置についても継続してください。

(2) 学校規模の違いを「地域の強み」とする提案

大規模校・小規模校の共存は、子どもの社会性と個性に寄り添う環境をつくり、豊かな育ちを育むことにつながります。また両校が交流する場を設けることで、多様な人間関係や新たな視点を育む機会を創出します。こうした多様な学びを保障する教育は、町の活力を高め芽室町の強みになります。

(3) 9年間を見据えた特色あるカリキュラムの可能性を検討

上美生の豊かな自然、地元野菜を活かした食育、地域のみなさんとの交流など、これまで山村留学などで大切にしてきた強みをベースに、小・中学校の9年間を見据えたふるさと教育や環境教育などのプログラムを取り入れて

ください。その9年間の連続的な学びをより深める選択肢として、小学校、中学校の両校を存続することが難しければ、小中を統合することで経済的負担を軽減しながら上美生に学校を存続する義務教育学校への改組なども含めた新しい学校のあり方について、柔軟に可能性を探ってください。

(4) 山村留学および親子移住への支援の継続と強化

1992年から活動を始めた「たらんぼの会」からの活動を引き継いでいる山村留学の取り組みは学校の存続にかかわらず、芽室町にとっては不可欠な地域活動であることから、その活動が継続していきます。したがって上美生ならではの暮らしや教育環境を求める親子に対し、山村留学の魅力を伝えるPR活動を一層強化していきます。これからも事前相談から募集・受け入れのプロセス、移住後も安心して生活できるよう支援活動を行っている上美生地区山村留学推進協議会に対する支援の継続と強化を要望します。

(5) 移住定住を促進するための住環境支援の強化

町内の空き家や教員住宅の活用について、柔軟な運用と支援体制を強化してください。移住希望者が住まいを確保できるような環境を整備し、移住定住の流れをつくり、上美生、芽室町の持続的な発展とコミュニティの活性化を目指すことを提案します。

(6) 地域と保護者、学校がみんなで育てる学校運営と活力支援

新しい学校や仕組みを行政だけに任せるのではなく、地域住民や保護者も一緒になって育てる「みんなの学校」にしたいと考えています。これまで以上に、地域団体が学校の応援や活動に主体的に関わっていけるよう、人的・物的な支援と継続的な財政支援を含めた、持続可能な協力体制を一緒に作らせてください。

4. 最後に

私たちは、地域活動の継続と教育環境の充実は表裏一体のものと考えています。学校の存続や新たな仕組みづくりは、行政にすべてを委ねるのではなく、地域住民および保護者自らが教育活動、地域活動に参画すべきと考えています。

町民や親の多様な願いに寄り添い、子どもたちの笑顔が絶えない上美生、そして多様な学びが選べる子育て先進の町・芽室町を維持するため、前向きなご決断を切に要望いたします。